

猪名部真根 と 猪名部御田 にまつわる裏話

猪名部真根の裏話

猪名部 真根、韋那部 真根（みなべ まね、いなべ まね）生年：生没年不詳

朝日日本歴史人物事典の解説には以下のように記されています。

「雄略天皇の時代(457～479)の木工(木匠 こだくみ)。猪名部は天皇や氏族に隷属する品部のひとつで、土木技術を提供する工匠集団。その部民の伴造、すなわち工匠集団の長には、新羅系の渡来人が任命されていた。4世紀末ごろ、有能な工匠が新羅より貢進され、造船や土木・建築工事にたずさわっていたという。真根は『日本書紀』雄略13(469)年の記事に名工とうたわれている。雄略天皇は宮殿・楼閣の造営に関心を持っていたといわれ、それらの造営に従事した真根は、日本に仏教建築以前の大陸建築を伝えるのに大きな役割を果たしたのであろう。」

またWikipediaでは、「日本書紀によると、采女の女相撲を見て刃先を誤り、雄略天皇の手前で豪語した事と違ったために処刑執行となる所、その仲間が真根の処刑による墨縄技術の失伝を憂う歌を歌う事で、それを聞いた雄略天皇が処刑中止の為の使いを出し、処刑執行寸前で中止となり、事なきを得た人物。」とあります。

なお、詳しい内容は以下の通り、次ページに原文も紹介します。

木工の猪名部真根は、石を質（あて＝木を削る台）にして手斧で木を削っていました。終日（ひねもす）木を削っても、誤って刃を傷つけることはありませんでした。其の場所（作業場）へ雄略天皇が遊びに来て「お前の技は確かにすごい。が、どんな状況でも誤って刃を石に当てることはないのか」と尋ねました。真根は「決して誤ることはございません」と自信をもって答えました。そこで天皇は采女（うねめ＝各地方の豪族が恩恵にあずかるべく、自分の娘などを天皇に差し出した。仕女）を呼び集めて、衣裙（きぬも＝裙はスカートや裾の意）を脱がせ、著犢鼻（たふざぎ＝犢鼻は子牛の鼻でふんどしの意）にして、面前で相撲を取らせました。真根もたまったものでは、ありません。時々手を止めて相撲を見たりしながら、木を削りましたが、ついに手を誤ってカーンと「やっちまった！」のです。天皇は「朕(われ)を畏れず、貞(ただ)しくない心で、妄(みだるがわ)しく、軽々に答えやがって！」と責めたてました。そして刑吏に引き渡し処刑しようとしたところ、同僚の工匠が真根（の凄技）を惜しみ、助命を願う歌を詠みました。

婀拖羅斯枳 偉儼謎能陀俱彌 柯該志須彌儼幡 旨我那稽麼 拖例柯柯該武預 婀拖羅須彌儼幡
あたらしき みなべのたくみ かけしすみなは しがなけば たれかかけむよ あたらすみなは
惜(アタラ)しき 韋那部(イナベ)の匠 架けし墨縄(スミナワ) 其(シ)が無けば 誰(タレ)か架むよ あたら墨縄(スミナワ)
惜しいことだ 韋那部の工匠が 掛けた墨縄は。 それが無ければ、誰に架けられるだろうか 惜しいことよ、墨縄

墨縄は直線を引く匠の道具。天皇はこの歌を聞いて反省し悔い惜しみ、喟然（なげ）いて頹歎（なげ）いてこう言いました。「危うく貴重な人材を失うところだった」。そして、使いを甲斐の黒駒に乗せて走らせ、真根を縛っていた徽纏（ゆわいづな）を解き、返歌を詠みました。

農播拖磨能 柯彼能矩盧古磨 矩羅枳制播 伊能致志儼磨志 柯彼能俱盧古磨
ぬばたまの かひのくろこま くらきせば いのちなまし かひのくろこま
ぬばたまの 甲斐の黒駒 鞍着せば 命死なまし 甲斐の黒駒
ぬばたまの(黒の枕詞) 甲斐の黒い馬に鞍を付けてたら、(鞍の重みの分だけ到着が遅れ)命は無かつただろうなあ、甲斐の黒駒よ

【日本書紀 卷第十四 雄略天皇十三年九月条】原文

秋九月、木工韋那部真根、以石爲質、揮斧斲材、終日斲之、不誤傷刃。天皇、遊詣其所而怪問曰「恆不誤中石耶。」真根答曰「竟不誤矣。」乃喚集采女、使脱衣裙而著犢鼻、露所相撲。於是真根、暫停、仰視而斲、不覺手誤傷刃。天皇因嘖讓曰「何處奴。不畏朕、用不貞心、妄輒輕答。」仍付物部、使刑於野。爰有同伴巧者、歎惜真根而作歌曰、

婀挖羅斯枳 倭儼謎能陀俱彌 柯該志須彌儼幡 旨我那稽麼 挖例柯々該武預 婀挖羅須彌儼幡

天皇聞是歌、反生悔惜、喟然頽歎曰「幾失人哉。」乃以赦使、乘於甲斐黑駒、馳詣刑所、止而赦之。用解徽纏、復作歌曰、

農播挖磨能 柯彼能矩盧古磨 矩羅枳制播 伊能致志儼磨志 柯彼能俱盧古磨

一本「換伊能致志儼磨志、而云伊志歌孺阿羅麻志也。」

猪名部 御田(鬪鷄 御田) の裏話

木匠(こたくみ)の鬪鷄御田(つげのみた)の裏話です。原文には、「命木工鬪鷄御田一本云『猪名部御田』」とあり、「鬪鷄御田」は「猪名部御田」とも思われますが、真偽は定かではありません。「一本云」とは一説にはという意味で、日本書紀では、「一書曰」、「一書云」、「一本云」、「別本云」、「旧本云」、「或本云」などと書名を明らかにしないことが多いようです。以下に逸話を紹介します。

即位12年夏4月4日。身狭村主青(むさのすぐりあお)と檜隈民使博徳(ひのくまの たみつかい はかこ)を吳国に使者として出しました。冬10月10日、天皇が御田に樓閣(たかどの)を造ることを命じました。そこで、彼は高樓の柱の上を四面(よも)に疾走していましたが、その見事さに伊勢の采女は思わず見とれてしまいました。御田の動きに気を取られた彼女は、足がもつれて倒れ、捧げる饌者(みつけもの 御膳之物)をこぼしてしまいました。その場に居合わせた天皇は、御田が采女を犯したのだと勘違いし、処刑しようと刑吏に引き渡しました。そばにいた秦酒君(はたの さけのきみ)は、琴の声にのせた歌で天皇に悟らせようと思いました。「神風の(枕詞)伊勢の、その伊勢の野原に立つ、茂った木の枝が、何百年もの風雪の中で多々折れて、やがてそれが尽きてしまうまで、大君に堅く仕えましょう。我が命もそれほどに長かったらなあ、と言っていた工匠の命が… なんと惜しい工匠か」…それを聞いた天皇は、御田を赦しました。

【日本書紀 卷第十四 雄略天皇十二年九月条】原文

十二年夏四月丙子朔己卯、身狭村主青與檜隈民使博徳、出使于吳。冬十月癸酉朔壬午、天皇、命木工鬪鷄御田一本云「猪名部御田」蓋誤也始起樓閣。於是、御田登樓、疾走四面、有若飛行、時有伊勢采女、仰觀樓上、怪彼疾行、顛仆於庭、覆所擊饌。饌者、御膳之物也。天皇、便疑御田姦其采女、自念將刑而付物部。時秦酒公、侍坐、欲以琴聲使悟於天皇、橫琴彈曰、

柯武柯嚙能 伊制能 伊制能奴能 娑柯曳鳴 伊哀甫流柯枳底 志我都矩屢麻泥爾 飢哀枳彌爾 柯挖俱
かむかぜの いせの いせののの さかえを いほふるかきて しがつくるまでに おほきみに かたく
神風(カムカゼ)の 伊勢の 伊勢の野の 栄枝(サカエ)を 五百(イホ)振る折(カ)きて 其(シ)が尽くるまでに 大君に 堅く

都柯陪麻都羅武騰 倭我伊能致謀 那我俱母鵝騰 伊比志挖俱彌幡夜 阿挖羅陀俱彌幡夜
つかへまつらむと わがいのちも ながくもがと いひしたくみはや あたらたくみはや
仕へ奉(マツ)らむと 我が命も 長くもがと 言ひし工匠(タクミ)はや あたら工匠はや

於是天皇、悟琴聲而赦其罪。

猪名川流域は朝鮮半島との交易地として栄え、秀逸な木工匠の拠点であったことが、日本書紀などの古書からうかがい知れます。彼らの活躍抜きには、日本の世界遺産や歴史的建造物の多くは存在し得ません。私たちの地域の身近に世に知られざる影の立役者、素晴らしき人々がいたことを、郷土の誇りとしていきたいところです。

参考資料 記紀歌謡 日本書紀歌謡 後半部 竹取翁と万葉集のお勉強ブログ <http://blog.goo.ne.jp/taketorinooyaji>
「木工鬪鷄御田の冤罪と秦酒公の琴の声」擅恣企画 上田 忍 <http://nihonsinwa.com/page/1469.html>
「韋那部真根は采女の相撲に気を取られ、刃を傷つけた」同上 <https://nihonsinwa.com/page/1473.html>